The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	京阪アクセントからみた漢語の実態
Author(s)	神谷, 馨
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1973, 6, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

京阪アクセントからみた漢語の実態

神谷　馨

一

漢語（字音語）のアクセント（以下アと略記）は、古くは、四声と関係があったらしい。[1] それは、中国語アと日本語アとの上手な中和策であったろう。しかも、全体として、やはり日本語の和語のア体系の中に組み入れられるのである。奥村三雄は「伝統的な漢語は、和語と同様の対立関係を示す型に多く集まる」と、漢語の分布調査からの傾向を述べている。[2]

ところで、現代日本語は、漢語が非常に増えている。しかも日々、新しい漢語が作られ、それも四字以上の長い語であることも少なくない。漢語は、話しことばよりも書きことばの方に多いだろうし、話す漢語と読む漢語とでは、後者の方が多いように思う。だから、読んで意味がわかっても、それを明確な（即ち、迷いのない、一定した）アで発音できるとは限らない。

そこで、漢語アについて、現代という共時において、どのような実態になっているかを調査し、そこから、漢語アに体系があるか否か、アと形態（モルフ）との間に関係があるか否か等について考えてみたい。筆者は大阪の東区で生れ育

ったので大阪方言を例にしたいと思う。しかし、漢語に関しては、内省に自信のない点もあるので、平山輝雄『全国アクセント辞典』の京都アを資料とする（全漢語語彙一九九一三語）ことにし、適宜、筆者の内省（以下神と注記）と比較検討する。京都アと大阪アとの相違など、問題になるだろうが、本稿は、個々のアよりも、ア体系の方に関心があるため、当面はそれで間に合うと思う。なぜなら、ア体系そのものは、京阪でそれほど差はないと思えるからである。むろん、問題になりそうな点は無視しない態度をとるつもりである。なお、京阪アと東京アとの体系の比較もぜひ必要であり、用意もあるが、本稿では紙数の関係で省いた。

漢語の中でも、固有名詞や数を含む語や混種語は、別途に整理したいので省いた。なお、⓪は平板、①は尾高、(1.25)は第二拍目の中途で下降、(1.3)(1.4)は、第三第四拍目で下降、②は頭高、③④は第三第四拍目で下降の頭高型。

二

○一字一拍の自立語

		②	①	⓪
漢語	全	7	14	70
	サ変	0	2	11
和		16	18	23
		（胃・碁・可・左・他・多・野ヤ）	（絵・字・茶・市・地）	（語・我・麩・炉・和）

京阪アの一字一拍語については問題が多い。一拍語といっても二拍語と等しく記述されることが多いからである。[3]とはいえ、一拍語として発音しないのではない。複合語になると必ず一拍になるし（日（ヒイ）―日当（ヒ）り、我（ガア）―我執（ガ））慣用句や連語になると一拍になりやすい（「陽（ヒ）の当る坂道」「我（が）が強い」）。池田要は、単音節語の長音化は語彙と関係すると述べている。[4]そして、長音化しにくい語は、平板型に属し、上昇下降型は長音化する語のみによるとも述べている。ただ、氏の挙げる用例集のアは、筆者のアと必ずしも一致しないし、長音化のしやすさしにくさも同じではない。言えることは次のことである。㈠和漢とも平板型の多いこと、特に漢語はそこに偏ること。㈡漢語は特に、揺れや個人差の激しいこと。㈢頭高型漢語はごく少数でしかも揺れのひどいこと（「胃・碁・他」は池田は平板に入れる。「他・多・左・野」は、自立性が弱く、筆者の場合、助辞を伴わない形でのアの内省はしにくい）。㈣長音化しやすい語としにくい語のあること等である。そして、漢語では、自立語として完全であるか、頻用されるかすると長音化しやすくなる（自立の完全さと語の古さ、頻用度、日本語化は互に関連する）。逆に、自立形態をとっていても、何らかの助辞を伴わないと用いにくい語（「この科」「智にさとい」）は長音化しにくい。なお、形容動詞にはなりにくい。「異な・奇な」等があるが、一般的には「――なる」の形、即ち、文語的には用いられるのである（「非なる・愚なる」等。平板型に偏り長音化しにくい）。

○一字二拍の自立語

和語の体言の型より一つ少なくなり（1.25）型がみられず（神（シン）では「質」が一例ある）一字一拍語の場合と同じ型しかない。そして和語での型と頻度の関係を漢語もうけつぎ、しかもその偏り方が和語より大きい。頭高型が最も多い。

		②	(1.25)	①	⓪
漢語	全	312	0	55	46
	キク	73	0	1	27
	チツ				
	サ変	42	0	8	8
	―な	5	0	3	5
和語	体	388	81	121	292
	用	2	0	76	85

（駅・曲・晩・別・得）

（運・代・剣・肺・宙）

（愛・策・難・罰・妙）

漢語全413語（神と異るもの27語6.5％）

キクチツで終る語は⓪②に集中し、①は、イ撥長音（害・胴・縁・腸）のみから成る。これは、音韻とアとの間に関係があるためとみてよいだろう。

○一字のサ変動詞（結合形態のものも含める）

	②	①	⓪
一拍	0	19	1
二拍	4	38	67

（利する）　（感じる・称する）

（化する・期する）（応じる・論じる）

（関・際・対・冠する）

全129語（神との異15語1.6％）

一拍漢字のサ変動詞は①に、二拍漢字のは⓪①に多い。二拍の場合は、和語の二拍の用言の頻度と傾向は同じになっている。即ちこれらは、もとの漢語のアを崩して和語化しているとみてよい。

○二字二拍の自立語

	②	1.25	①	⓪
全	488	24	55	35
サ変	59	0	19	1
―な	8	3	4	6

（布施・医者・胡麻・地味）（サ変の一例は「畏怖」(神)では②）

（皮膚・予備・位置・野卑）（(神)には「―な」はなし）

（秘書・幾可・午後・無茶）

（部下・危機・予知・馬鹿）

全603語（(神)との異52語8.6％）

最も多いのは②である。これも二拍の和語体言の傾向と似て、和語より著しい。動詞化しうる語は①②に集中する。

○二字三拍の自立語

（1＋2）拍語

①に最多。1.3は、後部要素が「性（セー）」や「終・兵・由・相」など長音化される語がくる（26の中、そうでないのは「乞食・午前・兎角」のみ。）動詞はなく、形容動詞語尾「―な」をとるのは一例「自由」のみである。③は皆無。

（2＋1）拍語

		③	②	1.3	①	⓪	
漢語	全	0	459	26	1459	411	1
	サ変	0	23	0	260	25	＋
	―な	0	15	1	84	12	2
和語	体	2	83	55	74	168	3
	用		10		24	84	拍
漢語	全	40	1509	60	460	168	2
	サ変	7	209	0	203	9	＋
	―な	2	32	0	12	1	1

（和語は「あ～お」のみ）

（美人・苦戦・不服）（陸地・整理・温雅）

（和解・未熟・異常）（評語・消費・丈夫）

（知性・乞食・自由）（坊主・紅茶・丁度）

（利益・区別・愉快）（半紙・熟知・安価）

（目下・列挙・質素）

全4593（神）との異628語13.6％）

②に最多。③は第二拍が捉音になるもの（ク・ツ）のみである。1.3は第二拍が長音化するものや撥音のものが多いようであり、用言になる例は見当らない。①は、イ撥長捉音が第二拍にくることが多く、それ以外は74語である。74の中、53語は「キクツ」プラス「ガ・サ・ザ・シャ行」（「席次・俗語」等）でそれ以外の行は21語である。これは、無声化と関係するのかもしれない。②には第二拍の捉音はない。

二字三拍語は、①②に多く、動詞（特に①）も形容動詞もそこに多いといえる。和語と必ずしもその頻度を同じくしていない。なおこの他に、和語には1.35（出っぱ・のっぽ）があるが、漢語にはない。

○二字四拍の自立語

これは語数が多い。型は⓪に断然多い。型の種類も、和語体言と同じく多い。④は、第二拍目が長音化したり撥音の場合に限られているようだ。④ (1.4) には用言はない。(1.4) には副詞が多い。③は、第二拍が捉音化する語（ツク）である。(1.3) は、第二拍がイ撥長音に多い。①は、イ捉撥長音が多く、それ以外は29語（神では12語）である。②は第二拍に捉音はない。

		④	③	②	(1.4)	(1.3)	①	⓪
漢語	全	7	43	603	22	113	589	6603
	サ変	0	9	50	0	9	126	
	―な	0	5	15	0	6	30	
和	体	78	49	30	51	47	227	375

（愛情・秀才・運動・熱心）

（人間・包丁・浪人・平等）

（兄第・生物・辛抱・現金）

（大概・大抵・段々・毎日）

（正体・現代・挨拶・親切）

（各国・説教・結構・厄介）

（蝋燭・道楽・半日・短冊・正月・巾着・万才）

全7980（神）と異506語6.3％

（和語は「あ～お」の語のみ）

以上のように、自立の単純語の調査をしたが、どの場合も、大体⓪①②が型の中心を占めていることがわかる。それ以外の型は、語数も多くなく、音韻的に何かの特徴のあることもあって、そのためにいわば型くずれしたものと考えられなくもない。⓪①②以外の型の音韻構造を示すと次のとおりである。大体第二拍目に特徴があるといえよう。

□□ 一字二拍
- □ クツキチ →⓪, ②
- ① → □ イン長

□□ 二字三拍
- □+□□ 1.3 □□ イ長
- □□+□ 1.3 □ クツ □
- □□+□ 1.3 □ イン長 □

□□+□□ 二字四拍
- ③ □ クツ +□□
- ④ □ 長ン +□ クツチ
- 1.3 □ イ長ン +□□
- 1.4 □ イ長ン +□□

三

ところで、音韻と関係があるのかないのか分析するには複雑すぎるのだが、次のような語がくると、ある型になりたがる傾向がある。これは、語（厳密には形態）の意味とも関係しそうである。二字の語について、①②型になりやすいものを列挙してみる。

（二拍）

①―化（孵・気）―死（縊・仮）

（三拍）

①汚―（職・水）帰―（国・宅）愚―（見・妻）移―（管・住）異―（常・国）加―（入・熱）私―（案・営）
私―（案・営）自―（活・供）女―（傑・工）多―（大・忙）渡―（英・来）微―（妙・震）美―（食・点）
破―（産・綻）未―（開・婚）予―（情・告）離―（郷・修）旅―（客・行）和―（装・解）―化（悪・硬）
―死（圧・急）―有（固・市）―加（参・追）―用（社・多）―車（電・発）―止（廃・中）―的（知・私）
②長―（期・者）悪―（意・夢）各―（位・自）外―（気・地）戦―（火・士）全―（科・治）大―（家・挙）
短―（歌・所）内―（意・助）本―（拠・土）名―（医・句）―下（階・城）―学（科・美）―長（座・市）
―者（作・信）―部（上・患）―内（区・以）

1.3 今―（度・夜）何―（位・時）

（四拍）

①常―（温・習）新―（鋭・劇）外―（人・観）代―（数・作）題―（目・材）先―（発・輩）町―（人・名）
中―（元・心）通―（勤・俗）同―（権・行）純―（白・情）
②各―（人・界）当―（代・年）本―（校・国）―山（高・連）―内（国・室）―外（国・室）―力（活・効）
① 1.3 1.4 毎―（夕・週）何―（才・年）明―（春・晩）今―（月・暁）農―（業・民）

なお、二字が互に次のような場合には②になるのが普通である。

反対語―可否・公私・上下・表裏・悲喜・有無・苦楽・善悪・当落・損益・大小

並立語―人畜・神仏・心身・水陸・年月

ここで、一字語・二字語の漢語を語基として考えた場合どうなるかについて検討しておきたい。元来、一字の漢字は、語として自立するもの、結合するもの、自立・結合両方に使えるもの、結合でしか使えないものがある。それは又、音よみ専用か、訓よみにも使えるかということとも関連しよう。

自立語基（音が自立しうる）

(イ)音のみ―胃・絵・絽・茶・僧・棒・式・毒

(ロ)何らかの訓もある―骨・音・文・美・曲・綿・無・命

(ハ)文語的・慣用句的に用い、訓のない語が多い―和・他・師・非・医・想・忠・感

(ニ)対立・並立語の一部や語の一部が独立―接辞化―優・良・可・上・中・下・部・課・都・道・府・県・・正・邪

(ホ)派生の一部となる

自立の場合の意味を残す―死す・座す・四角い・俗な・急に・実に・雑と

語源はともかく自立の意味とずれる―約す・変な・乙な・本に・決して・こ姓（ショウ）

結合語基（音が自立しえぬ）

(ヘ)訓をもつ―離・保・花・破・春・山・高

(ト)訓がない―械・磁・査・哲・鉱・婦

(チ)訓がなく語基にもなりにくい―挨拶・瑠璃・齷齪

その音のままでは語基になりにくい―提燈・椅子・炭団・塔頭（唐音）

(リ)派生の一部となる―お嬢さん・坊さん・ご飯・こ判・お代・まっ向・料る・力む・特に・篤と・颯と・杳として・平ちゃら・切に・断じて・概して・頑として・暗に・丁と・鈍な・嫁す・制す・察す

二字の自立語は、これらが組み合わさってできる。しかも、出来た二字の語は、元の一字の語基の意味と変ったりずれたりすることも多い。元に近い場合を正とし、語源はともかく、外れた場合を外とすると、次のごとき組み合わせができる（むろん、大ていの語はその境界があいまいだし、比喩もからむ）。

正自＋正自―苦楽・善悪（対立）、心身・水陸（並立）、絵本・論文・雑芸・僧服（修飾）

正自＋外自、または、外自＋正自、または、外自＋外自―本番・天火・茶番・段々・寒天

正自＋結合―鉄鉱・天国・軍人・象牙

外自＋結合―台詞・段落・円満・勘当

結合＋正自―除数・造語・争乱・退席

結合＋外自―初段・真髄・早晩

結合＋結合―灯油・電子・人間・山林

そして、このようにみてみると、二字の単純自立語として述べたものも、また内部構造は複雑であり、あたかも複合語的な構成をもっている。だからこそ、接辞的な要素も生じるのであり、事実、次節に述べる複合語における接辞と一致するものが少なくない。

ここで、漢語の種々の形態を、語構成の上から概観しておく。

A
- 単純語　A_1 A_2
- 複合語
  - 内部複合語 A_4 ＜
  - 内部派生語 A_3 ＜

B
- 体言的用法(句末)
- 副詞

A＋C（派生語）

A＋D
A＋E　（節や句）

C．接尾辞

- ぶる・めく
- らしい
- る・す・な
- さん・め

D．助詞

E．助動詞

A_1
- 一字自立語
- (我・絵・駅・愛)

A_2
- 二字自立語
- (医者・意見・運命)

A_3
- A_1 又は A_2 ＋接尾
- (美化・倍化・運命的)
- 接頭＋A_1 又は
- (新生活・不親切)

A_4
- A_1 又は A_2
- ＋A_1 又は A_2
- (社会生活・愛情過多)

A_5
- A_3 ＋ A_1 又は A_2
- A_4 ＋ A_3

A_6

B
- ～の死！～得
- ～拒否，～良好
- ～後，～時，～場合
- 約・午後・絶対・段々

（これらの説明および、アとの関係については、既に用意があるが、別の機にゆずる。それと併せ読まれるなら幸甚である。ただ、ア表には記しておいた。）

四

前節でみたように、厳密にいうと、漢語の単純語は、一字自立語に限るのがよいかもしれない。しかし、二字自立語も、別々に分けにくい点が多いため、一応A_1・A_2を単純語とした。ところが、三字以上の語、複合語は、大部分が二つ以上の要素に分けられる（本稿では、二字と三字以上の語とで区別して出発したが、字数に関係なく内部を観察するのが目的であることは勿論である）。

そこで、複合語のアを、前と同様に調査した。その結果、語基の結合には、ある程度確かな法則のあること、それは、語基の性格や語基間の関係、語基か接辞か等とほぼ対応して現われていることも認められた。

まず、自立しうる一語基を∑とする。[6] ∑の最小単位は、単純語A_1 A_2から成る。アの高低や、高起式・低起式等は、表のように示した。接辞はαとする。αのうち、接頭辞（およびその類）は∑の前に、接尾辞（およびその類）は∑の後につける。高くつくなら上に、低くつくなら下に記す。∑は、αや別の∑がついて一段大きな∑にできる。それにさらにαや∑がついて、次第に大きな語にもなる。∑は、元来は自立語だが、語基となると三種⓪①②型しかない。これは、単純語の型の中心がその三種だと前に述べたことと対応している。複合語を二要素に分けた場合、前部要素となる自立語基は全て平板、後部要素となる自立語基は全て頭高となっている。また、∑以外の部分であるが、∑のアの型を決めるものがあって、それは語彙的・語構成的に、接辞と思われるものとほぼ対応している。

「化・語・派・代・用・流・性・家」（動詞・形状・体言等を作る）、「会・学・期・費・力・部」（体言のみ）等は、語基の後部につき、「現・再・軽・原」「不・新・同・未」等は語基の前部につき、夫々、表のごときつき方をして語基のアを決める。

次に、調査の実数を述べておく。三字以上の字音語全六一〇四語について、結合語アを大雑把に調査した。そして、表示のようなア法則が見出された。ただし、平山アでは規則表に合わない語でも、筆者のアでは合うものは、規則表に合うものとみなした。漢語アには揺れがあるし、平山アには一つの型しか載せていないので、それくらいは許されていいだろう。このようにみても法則に合わぬ語を(×)、結合以前の一方又は両方のア不明(△)、接辞であるが、そのア不明(▲)、結合しているのに頭高(2)、結合しているのに平板(0)、として左のような数字になった。ただし、「県知事」の「県」のようなのは、接辞とみるよりも一字自立語として、ア法則に従ってみてもよい。しかし、ここでは、二字以上の語基を中心としたいので（一字の語基は、自立性の強い語は多くないし、又、いろいろな語の要素にもなりうる。ア法則も、二字の場合よりも整理がしにくい）「県」などの一字語は、接辞か語基かの判定はむつかしい。接辞的に他の語基に多くつき、アに型を求めるものなら、やはり接辞に類するものとみてよいだろう。

五

表で示したように、漢語アには、内部の結合において、法則めいたもののあることがわかった。即ち、全語のうち4.2％のみが法則に合わない語であり、他は、合っているか(△)(▲)(2)(0)なのである。そして、(×)になる語も、例えば「夏期②→夏期講座①.5（法則なら⑤）」のように、元の自立語のアを変えてしまうから(×)になっているものの、結

全6104　そのうち，(×) 257語(4.2%)　(△) 332(5.4%)　(▲) 65(1.06%)
(2) 121(1.9%)　(0) 64(1.04%)

⓪	⌋Σ	⌋Σ	⌋Σ$^{\alpha}$	⌋Σ$_{\alpha}$	Σ̀	$^{\alpha}$Σ̀	$_{\alpha}$Σ̀	⌋Σ$^{\beta}$	⌋Σ$^{\beta}$	⌋Σ$^{\beta}_{(\beta)}$	⌋Σ$^{\beta}$	⌋Σ$_{\beta}$	⌋Σ	○ ○ ○ ○　教育
①	⌉Σ́	⌉Σ	⌉Σ$^{\alpha'}$	⌉Σ́$_{\alpha}$	Σ̀	$^{\alpha}$Σ̀	$_{\alpha}$Σ̀	⌉Σ$^{\beta'}$	⌉Σ$^{\beta}$	⌉Σ$^{\beta}_{(\beta)}$	⌉Σ$^{\beta}_{(\beta)}$	⌉Σ́$_{\beta}$	⌋Σ	○ ○ ○「○　天皇
1.25 1.3 1.4	⌉Σ̂	同上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	⌉Σ̂$^{\beta}_{(\beta)}$	⌉Σ̂$_{\beta}$	⌉Σ̂$_{\beta}$	⌋Σ	○「○⌉ ○ ○　運命
② ③ ④	⌋Σ̀	⌋Σ	⌋Σ$^{\alpha}$	⌋Σ$_{\alpha}$	Σ̀	$^{\alpha}$Σ̀	$_{\alpha}$Σ̀	⌋Σ$^{\beta}$	⌋Σ$^{\beta}$	⌋Σ̀$^{\beta}_{(\beta)}$	⌋Σ̀$_{\beta}$	⌋Σ̀$_{\beta}$	⌋Σ	○⌉ ○ ○ ○　商売
	語基	前部	α_1	α_2	後部	α_3	α_4	β_1	β_2	β_3	β_4	β_5	β_0	語例
			語・派・風 性・鏡・表 経・用・流 家・米・堂 製・党・化 的・大・順 別・書・画 地・証・島 系・味・数 塔・草・帳 座・場・制 式・隊・亭 中・刀・灯 版・盤・状	会・学・期 市・費・部 力・案・感 業・権・国 策・室・紙 質・図・税 戦・族・体 団・度・帯 人・法・民 面・薬・量 類・下・記 機・区・士 誌・車・者 夫・婦・員		軽・重・高 低・現・原 好・再・最 超・副・量 猛・老・総 公・半・終 直・内・難 上・大・小 全・長・短 乳・夕・本 別・急・逆 金・銀・熱 脳・悪	新・赤・同 非・不・未 下・貴・稀 私・微・準 助・女・正 来・胃・腸 農・無	ぶる めく ばむ	ら⌉しい く⌉らい ⌉印のあるものは高くつくときはそこまで高くなる。	ら⌉しい △み⌉たいだ から ほ⌉ど く⌉らい △ごそ △さえ でも △し⌉か （なあ） （ねえ） △は⓪①には低くつくことあり。⑬⑫にはどれも高低いずれにもつく。	は・の が・を に・で と・か △だけ （か） （かしら） する △です △は①につくとだけ で「す」となって低くつくことあり。	だろう でしょう だ へ・と や・も より・やら なり・だの まで・など ばかり なんか なんて な （さ） （よ）	ー い ⌐しい ⌐ない ⌐ぽい	きょーいく＋か⌉てい ⌋Σ　⌋Σ̀ （教育課程） きょーいく＋か ⌋Σ　α_1 （教育家） きょーいく＋⌉めん ⌋Σ　α_2 （教育面） さい＋きょ⌉ーいく α_3　⌋Σ̀ （再教育） しん「＋きょ⌉ーいく α_4　⌋Σ̀ （新教育）

合の仕方は、その語基のアを変えた上では法則的になっている語が多いのである。事実、結合以前のこのような自立語基自体のアの違いは、平山アと筆者とで違いのあることが少なくない（「愛読」①→「愛読者」1.5、(神)では⓪→⑤）。これらは、平山アは平山アとして、筆者は筆者として、夫々結合アが法則に合うわけであり、問題はない（だから、こういう場合は正とした）。「夏期」のように、平山アも筆者のアも同じなのに、結合のときアが変る(X)のは、やはり、漢語アの揺れやすさ（「夏期講座」は、1.5にも⑤にも使うであろう）と関係が深いと思われる。次に(X)以外のものをとり上げてみよう。

(△)になるもの

(イ)暗々裏・遺留品・起重機・愚連隊・下手人・経常費・顕微鏡・大理石・公会堂・自叙伝・水族館・敵愾心・道祖神・日章旗・風来坊・分水嶺・文房具・防波堤・未亡人

これらは、接辞的な要素があるが、他の要素が自立できず、しかも他の語基や接辞とも結びにくい（用例の極少、派生表を作れない）孤立の結合語基といえる。「欠食児童・食虫植物」のように、後部要素が自立語基のものも少なくない。

(ロ)修道女・修道院・唯心論・唯心主義・自画像・自画自讃・防空壕・防空演習

これらは、幾つかの接辞や語基が後部要素に来ていて(イ)ほど孤立しないが非自立の語基である。

(ハ)晴耕雨読・善男善女・日進月歩・半信半疑・不即不難・万有引力・竜頭蛇尾

漢字四字で慣用・熟語・成語などをなすもの。⑥型になるものが多い。二要素に分けられそうだが、自立しにくく四字で一語とみなすのが自然であるもの。(2)(0)にもある。

(ニ)青少年・尺貫法・祝祭日・動植物・祖父母

これらは二語の混合・合併とみることのできるもの。

(ホ)松竹梅・真善美・都道府県・南南西・北々東・北々西

三語の並立的用法。

(ヘ)蜃気楼・地団太・天婦羅・依怙地・如雨露・都々逸・破天荒・素寒貧

これらは二要素に分け難く日本語化したものといえよう。

(ト)凡帳面・金輪際・落花生・醍醐味・虚無僧

語源はともかく、元の語基の意味に遠く、一語化したもの。

(▲)になるもの

養父母・生石灰・真面目・深呼吸・主成分・次年度・継父母・休火山・義兄弟

接辞らしいが、用例が少なく、とるアの型を法則化しにくいもの。

(2)になるもの

天下泰平・猪突猛進・無念無想・支離滅烈

(0)になるもの

⓪＋⓪（45語）有象無象・巧言令色・正真正銘・単刀直入・絶対絶命・基本的人権

⓪＋⓪（高＋低・14語）発売禁止・発育不全・油断大敵・新進気鋭・平穏無事

前部⓪(発売)後部①(禁止)に多い。(神)のアではこれらは結合すると①になる。

①⑬＋⓪（後部低・4語）用意周到・中央集権・白紙委任状・不眠不休

なお、∑＋∑が新たな語基となり、それに接辞や∑のついた語も法則は同様に調査した。それらも大体法則に従っている（人工⓪→人工栄養⑥→人工栄養児⑧、精神②→精神分裂⑥→精神分裂症⑨）。そのことから、一語のアは、やはり接辞が決めるといってもよいだろう。長い漢語になるにつれ、二字の語の場合よりも接辞がかなり意味的に明確になってくるが、語が長くなるにつれ、接辞らしい接辞（アの明白な）は、語のアを決める力が強いといえそうである（例えば「精神＋分裂症」と考えるなら、出来た語は⑥になるはずである。そのようになる例はほとんどない）。語は長くなるにつれ、前部要素から平板化してゆくといってもよい。そしてその平板前部要素が、後部要素を頭高で従えるか、接辞で決められるかして、一語のアが出来るのである。

αについては、表に挙げたように、かなりのものを取り出せる。それらの例から、漢語の接辞は一字から成るのが普通だといえる。ただ、これまでに述べたように、これらが、接辞か語基かについて、和語の場合よりも不明瞭だ。その理由は三つほどある。㈠まず、漢語の語基とは何かという根本問題に関係する。漢語における完全な自立語は、一字自立語A_1に限られ、それ以外は全て、広義の複合語となっている。だから、二字以上の一語の内部において、意味機能上、軽重や差異があれば、接辞的な部分が生じる。そして、それがアにも反映しているため、力関係として、接辞と考えてよいことが少なくない。しかしそれも、程度の差であり、接辞の要素が、語基として、前部にも後部にも使うことができるし、接辞のアも、法則として例外も多い。㈡接辞と思われる要素も、一つの音よみをもつ。そして、その一字に、いくつかの意味をもっている。それは和語の接辞に比べ、形態的に明らかでない代りに、接辞以外にも働くことができる。㈢接辞と思われる要素も、いくつかの種類がある。「語・順・隊・線、

会・図・部・量、悪・熱・胃・金、塔・堂・派、案・税」のように、自立単純語になれるもの、「米・画・味・草、人・国・紙・戦・薬・力、軽・高・最、長、新・同」のように、音よみのままでは自立できないが、そのまま意味としては（訓をもち）自立して訓の意味とも対応しているもの、「系・制、期・感・団、農・原・両」のように訓もなく自立もしにくいもの、「的・流・風・本」のように、音と訓で意味がぴったりせず自立もしにくいもの等に分けられる。そして、これらにつく語基の部分も、実はこのように、自立非自立の種々の段階があるのであり、それらが互に結びついてできた語は、非常に複雑なものにならざるをえないのである。そして、本稿では扱いきれないが、語内部のシンタックスも、語構成やアに影響を与えること大なるものがあって（対立の語は②になりやすいとかいうのはその現われ）、いずれ考慮を払わねばならないだろう。さらに、文のシンクタックスとも関係してゆく。例えばBに挙げたような用法は、漢語が、助詞も接辞も伴わず、裸のままで用法を異にしてゆく。体言と副詞とでアが異ったりする（「段々」体言⓪、副詞①,④）現象も面白いし、又、品詞によってアに偏りのあることも、当然とはいえやはり漢語のシンタックスと関係がないとはいえない。また、接頭語か連体詞かについては、漢語の場合、判定しにくい点があり、「各・前・全・本・故・同・今・当・某・脱・準」など問題になる。「各位・各界・各自・各所・各人」等の「各」は、後部が非自立語なので、全体で一語とみる方がよいのだろう（とはいえ、一語の中でもそれらがくるとア型を決める傾向がある。「各」なら②）。「各個人・各学界」等になると、連体詞とみなすのが普通だろうか。「全員・全盛・全滅」等も、後部が非自立なので一語と考えられるが、「全額・全会・全村」などは、後部が自立しうるので中間的なものかもしれない。「全日本・全学年」等になると連体詞とみられよう。そうなると、語基か接辞か連体詞かは、使用の頻度や文字数と関連して決められてゆくことになるのだろうか。ただ、アの上から

は、連体詞なら、ア法則に従わず、各々が別のアで連続される傾向があるということはいえる（「各」②＋「個人」②、「各」②＋「学界」⓪）。しかし、連体詞的なものの中にも、アの型をとるものもある（「本普請・本舞台」④）。これらはむしろ、アによって、接辞か連体詞かを区別する必要があるのであろう。

六

以上で、漢語の内部のアについての考察は大まかにはできたと思う。そして、このあと、派生語のアを考察記述したいのであるが、紙数の都合で省かざるをえない。また、漢語は、和語や外来語とともに日本語の中に存在するわけだから、やはり、外来語はもちろん和語について、漢語で試みたようなことを行い、その段階で、再び漢語を見直さねばならないであろう。

注

（1）金田一春彦「日本四書古義」和田実「赤とんぼ」（『国語ア論叢』）、桜井茂治「漢語アの国語化」（『国学院雑誌』60の9）等。

（2）奥村三雄「漢語のア」（『国語国文』昭36年1月）等。

（3）京阪アの一音節名詞は、その母音末尾を長くひきのばして発音されることが多い。その延ばし方にはいろいろの場合がある。例えば、佐久間鼎「京都語におけるア」（『音声の研究』4）では、単語単独の場合と句を構成した場合とでのちがいを、アの高低運動によって図示している。こういう現象は、準二音節語といわれたりしてきた。だから、記述の仕方などにおいて、工夫がされたりすることがある。しかし、これらは、「音声学的にはたしかに1音節であることがあるけれども音韻論的には2モーラと認められる。したがって、『日』はヒイであって、クサ（草）と同じグループにはいる」と考えるのがよさそうである（柴田武「日本語のア体系」――『国語学』21）。金田一春彦・和田実らも、二モーラとして記述しているようだ。

（4）池田要「近畿アの体系」（『国語ア論叢）。「『課・歌・紀・撥・智・堵・徒』の如き、主として漢語系虚体名詞にして比較的日

常の慣用に疎き類が短音の儘に止まるに反して『胃・柄・蚊・血・戸』など主として国語系実体名詞にして日常生活との関係密なる類が総べて長音化に赴くという顕著な形勢が観取される」

(5) 長音については議論が多い。有坂秀世は、長母音は二重母音と同じく、音声学的見地からのみ認めらるべきものであるとする（『国語音韻史の研究』401―403ぺ）。金田一春彦は、「引き音節」とよび、一個の音素と認める。それは、鼻へぬくか音をつめるか引くか、直後の音節によって決まるか直前の音節によって決まるかという点で撥促音と違うだけであるとする（「『五億と業苦』―『引き音節』提唱」―『国語と国文学』昭25年1月）。浜田敦は、調音の分析・発音意図の点から考察し、ひき音節を一個の音韻と認め難く、又、服部四郎のように、長音を母音音節、即ちモーラと区別することにも賛成できないとする（「国語音韻体系における長音の位置」―『国語学』22）。

(6) Σ表記については早田輝洋「日本語諸方言のア」（『NHK文研月報』昭43年10月号）の方式に準ずる。ただし、氏は一音節に一つのΣを使っている。

注記以外の参考文献

宮地裕「現代文法・語論」（講座『正しい日本語』巻五）等。
池上禎造「漢語の品詞性」（『国語国文』昭29年11月）
森岡健二「日本文法体系論」（月刊『文法』連載）
松下大三郎『標準日本文法』
山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』etc

言葉は沈黙から来たり、ふたたび沈黙へかえる。さまざまの国語は、
絶対的言葉を見出すためのそれぞれの試みのようなものである（ピカート）

（大学院学生）